〔連載〕武州みたけの信仰⑬

やまとたけるのみこと 日本武尊について（中）

國學院大學教授
神道学博士
三橋健

東国征伐への出発

ヤマトタケルは西の方のクマソタケルを征伐し、その帰りに出雲の国へ入り、イズモタケルを征伐いたしました。

都へ帰り、これまでの経過を報告いたしますと、またまた天皇は、次のようにヤマトタケルに命令なさいました。

「東方に十二の国があり、そこには朝廷に服従しない者どもがいる。それらを征伐しなさい」

天皇のご命令は絶対的なものですので、ヤマトタケルは引き続いて東方諸国の征伐に出発することになりました。

天皇はヤマトタケルにミスキトモミミタケヒコという者をつきしたがわせ、悪霊を払うヒヒラギで作った大きな矛を授けられました。

このようにして、すべての準備が終わり、ヤマトタケルは、まもなく都を出発いたしました。それは景行天皇四十年（一一〇）十月二日であったと、日本書紀には記してあります。

ヤマト姫を訪問

同月七日、ヤマトタケルは寄り道をして、アマテラス大御神をまつる伊勢の皇大神宮を参拝いたしました。そして叔母のヤマト姫のもとを訪ねられました。

ヤマト姫は、景行天皇の妹君であり、その時、伊勢神宮の斎宮でありました。斎宮とは伊勢神宮にお仕えする未婚の女性のことで、内親王ないし女王から選ばれるという決まりでした。

さて、ヤマト姫のもとを訪ねたヤマトタケルは、胸のうちを次のように語りました。

「私が西の方の悪人どもを平定して帰ってきて、さほど日もたっていないのに、父上から今度は東方の十二国の悪人どもを平定せよとのご命令であります。しかも軍兵を一人もつけてくださいません。父上は、私なんか早く死んでしまった方がよいと思っていらっしゃるのです」

涙ながらに語るヤマトタケルの話に、ヤマト姫はたいそう心を痛めました。

草薙の剣と火打ち石

ヤマト姫はヤマトタケルが出かける時、草薙の剣と火打ち石を入れた袋を授けて、

「もし、あなたの身に何か危険なことが降りかかったならば、この袋の口をお開けなさい」

と、やさしく慰めの言葉をそえられました。

ところで、この草薙の剣はむかしスサノオが出雲の国で八俣の大蛇を退治した時に、大蛇の尾の中から得た剣であります。あまりにも立派な剣であったので、スサノオはアマテラス大御神へ献上されました。天叢雲剣ともいって、のちに熱田神宮にまつられることになりました。

野火の災難

その後、ヤマトタケルは尾張の国へ行き、その国の豪族で国造の先祖であるミヤズ姫の家に泊まり、姫と結婚の約束を取り交わし、さらに相模の国へと進みました。そこでも豪族である国造が出迎えて下さいましたが、この国造はヤマトタケルをあざむいて野原に誘い出し、周囲から火をつけました。火はみるみる燃えひろがり、ヤマトタケルに近づいてきました。

これは生命にかかわる非常事態でしたが、その時、ヤマトタケルは、ヤマト姫の言葉を思い出し、袋の口を開いてみることにしました。すると中には火打ち石が入っていました。また腰には草薙の剣があります。ヤマトタケルは剣をぬいてまわりの草を刈りとり、それに火打ち石で火をつけました。すると、火は反対方向へと燃えて行き、無事に野原から抜け出すことができました。

ヤマトタケルは自分をあざむいた国造を斬り殺し、その遺体を火で焼きました。だからそこを焼遺というのであるというのです。この焼遺を日本書紀には焼津と書いてあります。駿河の国に焼津という地名があり、この神話はその地名の起源を説明したものと考えられますが、ここでは相模の国のことになっており、地理的に矛盾しております。

やまとたけるのみこと
日本武尊（青木繁画）
オトタチバナ姫をしのんで「吾嬬はや」といわれた時の姿を描いている

ああ、わが妻よ

さらにヤマトタケルは東へと進んで、走水の海を渡ることになりました。ところが、渡し場の神が波をたてて船はぐるぐると回るばかりで、前へ進むことができなくなりました。その時、お妃のオトタチバナ姫は、

「私が、あなた様の身代わりになって、海に入りましょう。あなた様は東国平定の役目をとげて、成果を天皇にご報告なさいませ」

と申し上げると、荒れ狂う海の中へ身を投げられました。

すると、荒波は静まり、ヤマトタケルは無事に向こう岸上総の国に上陸することができました。

それから七日目に、オトタチバナ姫の櫛が浜に打ち上げられました。ヤマトタケルはそれを拾い上げ、み墓をつくって、その中に埋めました。

ヤマトタケルは、上総の国からさらに東へと進み、蝦夷どもを服従させ、東国平定の目的をはたされました。

大和の国へ帰る途中、相模の国と駿河の国の境にある足柄峠にいたると、境の神が鹿になってあらわれました。それを打ち殺して峠に立つと、急に苦しい東国の旅とオトタチバナ姫のことが思いだされました。ヤマトタケルは万感胸に迫り、三度も深くため息をなさると、

「ああ、わが妻よ」

という言葉が、自然と口から出てきたのでした。